

仏の救いを求めて、一生懸命に拝み出してから、もう五十余年にもなります。そして仏に救われ、守られ、生かされている自分をふりかえり、救いを求めている多くの方々への信仰への道標となるならば、お守り下さっている神仏もお喜び下さるであろうと思って、書くことにしました。

(一) 交 通 事 故

昭和十五年、私の数え年十七歳の遭難

田舎町の巾三メートル位の狭い道路の左側を行く小学生の団体がありました。先方から先生らしき人が歩いて来ます。私は右側を自転車を走らせていました。「先生、お早ようじざいます。」と脱帽して先生に挨拶する小学生等を左に見て、道路の交差点を無警戒に

前進したのです。すると、右前の家の陰よりトラックが突然飛び出しアッと言う間もなく横側面に衝突してしまいました。道路の信号のない、自動車の数も少ない頃の希に見る交通事故でした。

失心して病院に運びこまれて気が付きました。右目の上の額に卵を半分に割った程のコブが出来ていました。スリ傷とコブの上に薬をぬり、精密検査もなく、"これでよし"と帰宅しました。自転車が大破したのですから、かなり強く頭を打ったのでしょうか。歩く度に頭にひびき、頭痛が激しく、草履を引きずるようにしてやっと歩きました。吐き気がして黄色の液を何回も吐きました。名医の診察と治療を半年も続けましたが、効が顕れないと替わりました。何をしても私の病気には効を顯さず、焦りと悩みは日増しに増え、一ヶ年も過ぎ去ったのです。

私を助けてくれるものはおらんのか

体の弱い姉が信仰で救われようとして某寺院へ日参していました。その姉が私に信仰を勧めたのです。信仰で病氣が治るかな？と半信半疑で姉に連れられて寺の門の外に立ちました。誰か自分が寺に入るのを見ていらないだろうか、見られるのが恥ずかしいのです。左右を見て人目をさけてこっそり寺の門をくぐり、長時間待つて住職さんにご祈祷を受けました。ご祈祷の後「小脳を痛めているから、毎日お加持を受けたらよい」とご神示がありました。私は毎日その寺に足をはこんでご祈祷を受けたのです。

しかし、私は仏の有り難い事は全く知りません。参詣者の多いその寺では、要領のよい人は後から来ても、和尚さんに先約してあつたとか、いそぐからお先にと、どんどんと先に祈祷を受け入って行くのです。初めの一、三日は辛抱していましたが、短気者の私は、いろいろして四、五時間も待ち、待ちくたびれて腹が立つてくる毎日です。この寺は道徳

を教えないのか、信仰するものは、自分のみの事を考えて行動してよいものかと、不平が心の中に一杯です。このような心では靈験もなく、頭痛はなおりません。姉に「信仰なんてつまらないからやめるよ」と言つてやめてしましました。それから再び物的療法を求めてあちらこちらと迷い、治療を受けること三ヶ月余り。しかし、薬も治療も全くききめは顕れなかつたのです。

再度寺の門をくぐる

困りぬいた私は、姉の勧めで二十八日不動尊のご縁日にお寺にお参りして、護摩供の後で法話を聞きました。不動尊の教えとして、住職の説法の中に『人の欠点を見て、腹を立てて信仰を中途でやめるような事で難病がなるものか。病気がなおりたいと思う者は、自分の罪を懺悔せよ。人のふり見てわがふり直せ。悪いと思う事は、行う事なけれ。人に

不快な心を起させらる者は、寺参りしても仏の加護は少なくなる。不動尊を信する者は、怒らず、貪らず、不平不満の愚痴を言わず、人を愛して信仰せよ』この教えは、私の強慢心と迷いを打ちくださいました。私は深く反省し、過去のわがままと、間違ったを行いをわびたのです。

人の善悪を論じて不足に思い、信心を中途でやめるような心では駄目だ。自分は病氣で何も仕事が出来ない身である。忙しい人には先をゆずり、ご祈祷を受けてもらえばよい。私は晩まででもこのお堂に座って待つて、ご祈祷を受けよう、一心に信仰しようと心に誓いました。

お参りです。うつむか顎を落とす腰身含む「ヨロシマツカ

スル」の意味をもつてゐる。おひら眼をゆきまわす顔を含む「ヨロシマツカ

日 参

弁当持つて朝家を出て九時頃に寺に着く。私はもうあせらない。腹も立てない。いそが

しい人には「どうぞお先に」と順番を譲る心に余裕が出来て、長時間有難いお堂に座らせて頂ける事が有難いと思うようになりました。毎日お参りする事が楽しくなり、二十一日間、日参した頃には、どうしてもおらぬ頭痛が消えていきました。どんどん歩いても頭にひびかぬようになり、走って見たが、やはり痛くありません。私は不動尊に助けてもらつたのです。心より不動尊に感謝して御礼を申し上げました。

般若、心経を習う

今迄は頭痛の為に本は読みませんでした。いや、読んでも意味が解らぬ程で、読む気も起こらなかつたのですが、やつと本を読む力も戻つたのです。

お経を習おう。有難い般若心経をと習い始めました。十五日、二十一日、二十八日のこのお寺の法要日には、信者の方々のあとについて小さい声でお経を読み出しました。信者

の人は、経本を持って心経をあげる人は少なく、暗誦です。私も暗誦出来るように練習しました。

寒行

この寺の住職さんや弟子さん、それに熱心な信者の方は、夕方六時頃より二時間位、信者の家々に廻り、門口でお経をあげる修行を寒中一ヶ月毎晩続けていました。提灯と念珠を左手に持ち、右手に錫杖を持って、黒衣にアジロ笠の修行僧の姿です。修行に出る前に、水行をして出かけられる住職やお弟子さんに私は心をひかれました。私は俗人の身ですから衣、袈裟はありませんが、この市内の有名な神社やお寺を拝んで廻ります。日支事変と言つて戦争が始まっています。早く戦争が済むように、天下泰平を祈つて私なりの寒行をしました。

私は何をしたらよいか

一ヶ月の寒行の終わった私は、頭の痛みも完全に治り、信心の有難さ、神仏の御加護の尊さを身を以て覚らせて頂きました。医学や治療術で救われぬ者が、信仰によって確かに救われます。この世の中には、医学や治療だけでは助からぬ者があります。このような人を私は助けられるだろうか、助けられる人になれるなら、私は僧になりたい。住職さんに、私はどんな仕事をしたらよろしいですか、お不動様にお伺いして下さいと頼みました。

きたないものをきれいにする仕事をせよ

不動様は『きたないものをきれいにする仕事を与える』と言うお告げです。これを聞い

た時、掃除役かな……しかし私は、ただの掃除夫にはなりたくないな——と思いつながら何日かたちました。

きたないものをきれいにする仕事は、仏道の修行です。己を正しくし、人を正しくする事は、よごれたものを清め助ける仕事です。人は迷うが故に間違った事をします。間違った事をして罪を造り、罪を造る故に苦します。私は自ら心の掃除をして迷う人の心の掃除をしてあげましょう。迷う人、苦しむ人の救済、これが私の一生の大仕事。これをやろう、必ずやりぬこう、と心に誓ったのです。